

家庭経営の変動に関する生活史的研究

F-33

Ⅱ 生活実態調査——福島県農山漁村地区を例として——

1 家庭経営の変容 (2) 結婚慣習の地域差と世代推移

○ 郡山女大家政 大方美子 福島大教育 岡村 益

目的：農山漁村という地域条件と経済基盤を異にしながらも、家業としての共通性をもつ家族における結婚慣習の推移を述べ、家庭経営者としての主婦の形成の経過を展望する。方法・対象：質問紙による面接調査であるが、生活史的手法を横断的に用いた。すなわち地域内の各年齢の女性のライフヒストリーをとり、結婚年次別に集計した。また、世帯主の妻・母・後嗣の妻の3代の女性の居る直系家族について率例的に、家計簿・日誌等も併用して世代比較法による縦断分析を試みた。調査時は昭和47・8年、対象地は既報の通りである。

結果：調査対象者について、世帯主の妻・母・嫁という家族における現在の地位と年齢の関係をみると、漁村では家族周期が規則的で交替が早い。山村は不規則でかつおくれの傾向がみられた。結婚年齢は地域とも戦前は20才未満に集中し、戦後は20才以後になる傾向があるが、労働と生活時間の特殊性や学歴と関係してか、漁村は早く農村はややおくれの傾向にあり、山村は不規則である。入婚圏については、部落内婚率は僻遠の山村にありて最も高く、次いで農村となり、村内婚率は漁村に多い。結婚に至る過程も仲人の役割が大きく、見合いも稀でありながら恋愛も少ない。見合い新婚旅行は昭和36年以降一般化し、婚姻届も早まる傾向である。以上のような伝統的結婚は伝統的な家庭経営様式に順応させる作用をしてきたし、とくに農村にありて嫁の地位は力づけるに後ほじめて安定すること、すなわち家庭経営者の形成には、特定の段階を要することが明らかになった。